

静岡人は日本一お米好き？

一写一筆

静岡の今



お田植え神事―田植えの時期には毎年、静岡浅間神社による田植えの神事が行われる。静岡市葵区、全日写連山田康さん撮影

静岡を代表する農産物といえば「お茶」と「みかん」だが、実は「お米」で「日本一」の話題が二つある。

一つは、静岡人の米好きである。2人以上の世帯が年間にお米に使うお金と食べる量はいくらか。県がまとめた「静岡県水田農業の現状」（こめ白書、今年3月）によれば、使うお金は静岡市が3万4129円、浜松市が3万2198円で、全国の県庁所在地・政令指定都市で1、2位。

食べる量は浜松市が100・13^ポ、静岡市が90・88^ポで、こちらも1、2位である。両市で県内の総人口の約40%を占めるから「静岡人は日本一のお米好き」（県農芸振興課）と言って

もいいだろう。新鮮な魚介類やワサビなど豊かな和の食材に恵まれていることも、お米の消費に拍車をかけているという。

お米をよく食べる県だ

が、2015年度の県内の主食用米の需要約22万4千トのうち、県内の稲作農家約1万8千経営体の生産量は約8万1千トで、消費量の3分の1しか自給できない。

環太平洋経済連携協定（TPP）など米をめぐる環境が厳しさを増す中で、県では耕作者や水田を集約して経営体を大規模にする働きかけやブランド米の開発、その栽培農家を育成する努力を続けている。

もう一つの「日本一」は、県が全国に呼びかける「お米日本一コンテスト」である。昨年の12回大会には全国39道府県から587品の出品があり、県産米も「最高金賞」を獲得した。静岡生まれの酒米「菅富士」は、昨年のミラノ国際博で「サケ」を世界の「左党」に発信した。「よく食べる子は育つ」である。

（前静岡県監査委員・富永久雄）